# 7［小説］『』

─眼科医として働く「私」は、故郷である九州のある村で、一人暮らしをしていた父が火事で焼死してしまったという知らせを受け、帰郷する。以下は、村長の案内で父の遺体と対面する場面である。─

　私はのを取り、中の遺体をａギョウシする。父親の姿というより、完全な焼死体だった。どこをとっても父親の形はない。これが父親なのだと自分に言いきかせているうち、急に涙がこみ上げてきた。〈こんな死に方をさせてすみませんでした〉と胸の内でびるごとに、涙は①波が寄せるようにｂオソってくる。

「先生、もう閉めてよかですか」村長が言い私はく。「村の者には見せんようにします」

　②そのほうがいいと私はまた頷き、勧められるままに柩の前にり込んだ。ハンカチを出して涙をぬぐう。

　にわかに玄関の方が騒がしく③なっていた。黒い服を着た村人が二、三十人、靴を脱ぎ、板の間に集まって④来ていたのだ。ｃアンモクの了解があるかのように、村人たちは整然とを寄せあって並び、程なくそのうちのひとりが私の前に進み出て、額を畳にこすりつけるようなお辞儀をした。八十歳は超えたと思われる老女だったが、薄手の喪服を着ていた。

「あたしは先生に何度、命ば救われたことか」と、老女は父の名を口にした。「一番下の娘を腹の中にっとるときは肺炎、持病だったも薬で治してもらったし、六十歳過ぎて、のも見つけてもらいました。町の病院で手術して、今ではもうどうもありまっせん」

　老女のｄワキに坐っていた女性は六十がらみで、長男の嫁だという。彼女も私の父からの病気を見つけてもらったらしかった。医院がｅヘイサされてからは、町の病院に通わざるをえず、父にはずっと現役でいて欲しかったと、ともども目にハンカチをあてた。

　そのあとも、糖尿病でいつも父に説教されたという村役場の職員や、痛風もちの老人、リウマチで投薬を受けていた中年婦人、子供の頃、鎖骨を折って父からテープ固定された中年男性など、次から次に私の前に進み出た。私は村人たちの話に耳を傾け、最後に頭を下げて返礼をした。中には黙って私の両手を握りしめ、「先生には本当にお世話になりました」とだけ言い、涙を流す者もいた。

「先生にこの村で生きていてもらうだけで、あたしたちは心強かったとです」

　日焼けした顔と、ゴツゴツとした手からいかにも農家の婦人と分かる七十がらみの女性から言われたとき、私はそれまでこらえていた涙を不覚にも流してしまった。涙が出るととまらず、私はを何度かして、肩を震わせた。こんなざまを女房子供には見せられず、ひとりで来てよかったと思った。

　私は村人たちの語る父の思い出話のなかに、⑤自分の知らない父親を見ているような気がした。家の中ではあまりしゃべらず、どちらかと言えば無愛想な父が、村人たちの記憶のなかでは、いつもにこやかで気さくに声をかける医師に変わっていた。

　百人は優に超すと思われる村人たちから、ひとりひとり弔問を受けたあと、私は本当は父親を十分の一も理解していなかったのではないかと思い始めていた。⑥本当の父は、息子である私のなかではなく、村人の間で生きており、これからも生き続けるのではないか─。そう思わざるをえなかった。

●語注

がらみ＝（年齢などを表す数詞に付いて）…前後。

◆漢字

本文中の二重傍線部ａ～ｅのカタカナを漢字に直せ。

ａ〔　　　　　〕　ｂ〔　　　　　〕　ｃ〔　　　　　〕　ｄ〔　　　　　〕　ｅ〔　　　　　〕

問１　傍線部①に用いられている技法を次から選べ。 8点

ア　隠喩　　イ　換喩　　ウ　直喩　　エ　提喩

〔　　　〕

問２　傍線部②とあるが、私がそのように考えたのはなぜか。わかりやすく説明せよ。8点

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問３　傍線部③・④がどちらも「なった」「来た」ではなく、「なっていた」「来ていた」という表現になっていることから読み取れることを次から選べ。 8点

ア　予期した以上に、思いがけないほどに

イ　ふと気づいてみると、いつの間にか

ウ　あまり好ましくないが、自分の意に反して

エ　とても長い時間をかけて、ゆっくりと

オ　なんとなく感じていたように、想像と同じく

〔　　　〕

問４　　　内の描写からわかる「父」の医師としての人物像の説明として適当でないを次から一つ選べ。 8点

ア　多くの人たちを心身共に救い、支えになってきた。

イ　長い年月にわたって、村の人たちを診療してきた。

ウ　町の病院の医師よりも、はるかに腕が優れていた。

エ　外科内科問わず、様々な種類の診療を行っていた。

オ　仕事を退いてからも、父の存在が人々を元気づけていた。

〔　　　〕

問５　傍線部⑤の内容を端的に表した箇所を本文中から二〇字以内で抜き出して答えよ。9点

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問６　傍線部⑥とあるが、「私」がこのような認識に至った理由として最も適当なものを次から選べ。 9点

ア　家族と暮らしていたときは頑なに心を閉ざしてしまっていた父が、今は村で自由に伸び伸びと生活していたと知ったから。

イ　父が息子の自分に対して見せていた面が、実は故意に本心を見せまいと、半ば演技していたものだったことに気づいたから。

ウ　自分に対してはぶっきらぼうに接していた父が、村の人たちには親身に接していたということに、軽いを覚えたから。

エ　これほど村の人たちに慕われていた父を、このような形で死なせてしまった責任の重圧から、目を背けたいと思ったから。

オ　弔問者の話を聞くにつけ、自分の知る無愛想な父より彼らの記憶にある医師としての父こそ、本当の父だったと感じたから。

〔　　　〕

【解答】

漢字　ａ凝視　ｂ襲（って）　ｃ暗黙　ｄ脇　ｅ閉鎖

問１　ウ

問２　（父をよく知る村の人たちに見せるには）父の遺体の損傷があまりにひどかったから。

問３　イ

問４　ウ

問５　いつもにこやかで気さくに声をかける医師（19字）

問６　オ

■覚えておきたい語句

□1　凝視……………………じっと見つめること。〔反〕一瞥

□10　口にする………………口に出して言う。

□18　耳を傾ける……………注意して聞く。

□22　不覚……………………思わず。

〔場面の把握〕

　小説を読む際に注意しておきたいのは、場面に描かれているそれぞれの出来事と人物の行動の関連性や、登場人物のものの見方（認識）の変化とそれをもたらした出来事との因果関係である。

　　　　↓

父の弔問に訪れた村人たちが語る、生前の父の思い出や父への感謝の言葉、それを聞いた「私」は父に対する見方を大きく変える。その変化をしっかり読み取ろう。

〈作者＆出典〉帚木蓬生（ははきぎ・ほうせい）一九四七年（昭和22）福岡県生まれ。小説家、精神科医。東京大学仏文科、九州大学医学部卒業後、医師として働きつつ、執筆活動に励む。一九九二年『三たびの海峡』で吉川英治文学新人賞、一九九五年『閉鎖病棟』で山本周五郎賞、二〇一〇年『水神』で次郎文学賞受賞。本文は、『』（新潮文庫、二〇一一年）所収「百日紅」より。

【読みのセオリー】

★出来事と人物の関連性を読む

　小説では、その場面で描かれている出来事とそれに伴う人物描写との関連をおさえることが大事である。

　本文では、父の弔問に訪れた村人たちが語る父の思い出話が、「私」の父に対する見方を大きく変えるのである。

■読みのセオリー［実践］出来事と人物の関連性を読む

問５・問６

【「私」にとっての「父」に対する認識の変化】

　家の中では

［１　　　　　　　　　　　　　　　　］な父

　　　［村人たちの話を聞いて］

　　　　　　↓

［２　　　　　　　　　　　　　　　　］医師

　　　　　　↑

　　　⑤自分の知らない父親

〔解答〕　１あまりしゃべらず、どちらかと言えば無愛想　２いつもにこやかで気さくに声をかける

☆「セオラム補充問題」　問題は、次の３種類があります。

　　＊差し替え　　　……該当の問と差し替えるもの

　　＊追加　　　　　……同じ問で、追加された問題

　　＊新問　　　　　……追加可能な新たな問題

＊追加

問１　傍線部①の表現を言い換えたものとしてもっとも意味が近いものを次から選べ。

ア　一切途切れず、連続して

イ　強く激しく、一気に

ウ　ゆっくりと、しかし着実に

エ　湧き上がっては、また収まって

オ　自分の意志とは無関係に

［答］エ

＊差し替え

問３　傍線部③・④がどちらも「なった」「来た」ではなく、「なっていた」「来ていた」という表現になっていることから読み取れることを簡潔に答えよ。

［答］気づいたら、すでにそうなっていたということ。

＊新問

問　29行目「そう思わざるをえなかった」という表現からは、「本来そう思いたくないが、その意に反しても思わずにはいられない」という「私」の心情が読み取れる。「私」に「そう思いたくない」部分があるのはなぜか。本文に即して説明せよ。

［答］自分が本当の父親を（十分の一も）理解していなかったことを認めることになるから。

　　　（別解）自分の知らない父親が本当の父親の姿であると認めることになるから。